

2021年11月13日
年間第33主日
菊地功大司教 メッセージ

教会の典礼の暦は終わりに近づいています。そのため、典礼の朗読は、世の終わりを示唆する朗読が選ばれるようになります。

ダニエルの預言は、救いの日にはさまざまな苦難が伴うが、神の民は大天使ミカエルによって守られるであろう事を記しています。

マルコ福音は、受難の時が間近に迫る中でイエスが語った言葉を記します。さまざまな苦難に直面するものの、「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」と記すことで、愛に満ちあふれた神はご自分の民を見捨てることはない、イエスは確約されます。同時にイエスは、わたしたちが「時のしるし」をしっかりと識別し、つねに備えている者であるようにと呼びかけます。

ヘブライ人への手紙は、主ご自身が自らをいけにえとされた唯一の献げものを通じて、わたしたちをあがなってください、新しい契約について語ります。赦されたわたしたちは、その愛といつくしみに包まれて、それに応える生き方を選び取らなくてはなりません。契約なのですから、一方的に受けるだけでなく、わたしたちには果たすべき責任が課せられています。

つねに目覚めて備えるわたしたちは、それではどのようにして、自らに課せられた責任を果たしていくのでしょうか。主は、最後の晩餐で聖体の秘跡を制定されて、「わたしの記念としてこれを行え」と命じられました。わたしたちには、主ご自身が語り、行われたように、生き、また語ることを求められています。

2015年から16年と続いたいつくしみの特別聖年の締めくくりにあたり、教皇様は使徒的書簡「あわれみある方と、あわれな女」を発表され、年間第33主日を、「貧しい人のた

めの世界祈願日」と定められました。

主イエスの言葉と行いに倣って生きようとするわたしたちにとって、貧困にあえぎ、生きることの困難を抱える方々への心配りは、忘れてはならない行動であります。教皇様の書簡にはこう記されています。

「人工の楽園で安易な幸福を約束する幻想を追い払うためには、わたしたちには希望と真の喜びのあかし人が必要です。多くの人を抱く深い空虚さの感情は、わたしたちが心に保つ希望と、それが与える喜びによって克服することができます。わたしたちは、いつくしみに触れられることによって心にわき上がる喜びを認める必要があります (3)」

神のあふれんばかりの愛といつくしみに包まれていることを自覚するとき、わたしたちはこの社会にあって、真の希望と喜びをあかしする者となることができます。

教皇様は、「イエスの間近にあることへの願望は、兄弟たちの隣人となることを求めます。なぜなら、具体的ないつくしみのしるし以上に御父に喜ばれるものはないからです」と記して、わたしたちを具体的な愛の行動へと招いておられます。

教会は今、そのあり方を振り返る回心の道を歩んでいます。シノドスの歩みは、「参加する」、「聴く」、「識別する」ことを、教会に属するすべての人に求めています。とりわけ教会は人々の声に耳を傾けて「聴く」ようにと神から招かれています。また人は隣人の声なき声に真摯に耳を傾けなければならないのです。耳を傾けあうところに「交わり」が生まれるからです。

助けを必要としている人の声に耳を傾け、そのもとへと駆けつける教会でありましょう。